

四国大学紀要, (A) 53 : 51–68, 2019
 Bull. Shikoku Univ. (A) 53 : 51–68, 2019

米沢本『沙石集』の副助詞ダニ・サヘ・スラ

——中世説話集における〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉〈把同的極限性〉の意義の一確認——

田中 敏生

【キーワード】沙石集 副助詞 中世説話集 古活字本 貞享整版本 加納協三郎

【論文概要】米沢本『沙石集』から副助詞ダニ・サヘ・スラ三語の用例を取り上げて、これらの語の基本的意義を、〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉〈把同的極限性〉に求めるといふ観点から、そのふるまい方の記述を試みる。それによって、この文献ではこれら三つの基本的意義が概ね保たれていること、スラが多いのは漢文訓読的な位相によるものであること、などが確認される。

はじめに

本稿は、米沢本『沙石集』から副助詞ダニ・サヘ・スラ三語の用例を取り上げて、これらの語の基本的意義を、〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉〈把同的極限性〉に求めるといふ観点から、そのふるまい方の記述を試みるものである。

よく知られているように、上代以来、ダニは、これら三語の中で最も盛んに用いられていたが（文献①・一五五頁、文献⑬・三〇頁。また文献⑥④）、中世に至って少しく変容を蒙り、遅くとも江戸時代の初めには、これまた変容を遂げたであろうサヘによって、その主な用法が取って代わられる（文献②⑬③）。これを意義的な方面から見れば、ダニの有する〈相対的輕少性〉の意義を、〈周縁波及性〉から〈周縁退縮性〉へと変貌したサヘが、その近似的なありようにおいて受け継いだといったふうに考えることもできるであろう（文献⑧）。こうした遷り変わりについて、その実

態をより詳しく知るためには、中世における諸種の文献における、これらの助詞の使われ方を丁寧に観察することが必要であろう。そうした考えから、これまで説話集や軍記物語に材を仰ぎながら調査を進めてきたが（文献⑨⑩⑪⑫）、本稿では、そうした作業の継続として、『沙石集』について調査を試みたい。即ち、ダニの〈相対的輕少性〉の意義や、サヘの〈周縁波及性〉の意義が、どの程度にまで保たれているのかを、箇々の用例に即して確かめようとする。また『沙石集』ではスラの使用が目立つ（八例）ので、そこでの意義面でのありようや、多く用いられることの事情についても考える。そうした検討を通して、これら三語の使われざまを、『沙石集』という資料の限りに明らかにしておこうというのが、本稿のねらいである。

『沙石集』のダニ・サヘ・スラについては、既に加納協三郎氏による調査がなされているが（文献①）、そこでの依拠資料はおそらく貞享三年の整版本（流布本系）ではないかと察せられる（注①）。周知のように、『沙

『石集』は、数度にわたる改稿がなされたという事情もあつて、その伝本は甚だ多様であり、『系統的整理は難渋をきわめる』（小学館「解説」六三二頁）とされるが、そうした中であつて、俊海本・米沢本など「十二帖本」

（古本系）と呼ばれる系統の本は、『最も古態を残す』とされ（同）、「十帖本」（古本系）と呼ばれるグループがこれに次ぎ（旧大系所収の「梵舜本」もこれに含まれる）、慶長古活字本など「流布本系」と呼ばれるグループ（十帖本）と「五帖本」とに分かれたる）がさらに後代的なものとして位置する（同、六三一～六三三頁）。そして、近年の研究によれば、米沢本は永仁改訂以前の初期的阶段（一応の擧筆宣言は弘安六年・無住・五八歳）の諸本に、梵舜本は永仁（無住・七十歳ごろ）改訂前後の諸本に、東大本・岩瀬本などは永仁と徳治（無住・八十歳過ぎ）との二度の改訂を受けて以後の諸本に、それぞれ属するとされる（文献④の「序章」による。本稿で関説する慶長古活字本や貞享整版本などは、さらに後代的ということになるのかも知れない）。こうした本文研究のありように鑑みれば、『沙石集』については、米沢本に基づきつつ改めて調査を行なうことが必要となるであろう（注②）。

以下本稿では、右のような考え方のもとに、これら三つの助詞の使われ方を、次のような順序で検討して行くが（注③）、この検討によって明らかにされる事柄を予め結論的に言っておくならば、この三語は、ダニに問題とすべき幾つかの例はあるものの、概して言えば、前代以来の基本的意義を保っていると考えてよいであろうし、スラの多い理由についても、その漢文訓読的な性質という点に求められることになるであろう。

〔一〕ダニ

〔二一例〕

- 1…願望表現
- 2…仮定条件
- 3…否定述語
- 4…類推表現

- 二例
- 三例
- 三例
- 一二例

- 〔二〕サヘ
- 〔三〕スラ
- 〔三例〕
- 〔八例〕

一 願望表現・仮定条件・否定述語（ダニの様相・一）

第一に、願望表現で用いられるダニとしては、左の二例を挙げる事ができる。一般に願望表現で用いられる場合、ダニは、その接する語句が、想定される他の要素に較べて相対的に小さな要素であることを示し、それによって、願望表現全体としては「せめてもの願い」とも言うべき意味を表わすことになる。所謂「最低限願望」（文献③）の用法である。このことは、次の第一例についても、よくあてはまるであろう。

①（二九二）《昔、良少将、深草の天皇に後れ奉りて、世を通れ、実の道に入りて、行ひけれども、かの御名残悲しくて、〔服喪の〕御果てに、人々衣替ふるよし聞きて、みな人は花の袂になりにけり苔の衣よかはきだにせよ》（巻五末・六…哀傷之歌の事）（旧・二四八）（古・二三一・左・一／頁・一九六）

②（五五四）《さて、覚遍などが公請勤め候はんは、とざまなる瘦せ駄なんどに乗りて、檜笠着て出仕もすべきや」と申されければ、〔一乗院は〕「やがて然（さ）だにもおはせ。よも御不足あらじ」とぞ宣ひける。》（巻一〇本・八…証月房通世の事）（旧・四二二。ただし仮定条件句での用法。後述）（古・四二六・左・四／頁・三三七）

①は、良岑宗貞（僧正遍昭）が仁明天皇に先立たれたときの歌を紹介したものである。彼は仁明帝の藏人の頭であつた（古今・八四七、詞書。第三句は「なりぬなり」。下の句は、「私の僧衣を脱ぎ替えることはできないが、せめて乾くだけでも乾いてほしい」との意と取れよう。最も望ましいのは陛下がご存命であることだが、それは叶わないとしても、せめて自分の悲しみだけでも癒えてほしい、そういった意味合いが詠み込まれてい

る。ダニは、望ましさの度合いにおいてより低い要素を掲げるのに用いられている。(相対的輕少性)の意義が、そのような形で發揮されていると言えよう。仁明天皇の崩御は八五〇年だから、歌は沙石集の編纂(一二八三年撰筆)より四百年以上前のものであるが、ダニのはたらき方自体は、このように考えることができる(注④)。

他方②の例は、願望表現と共に用いられてはいるものの、最低限願望としてのありようを見て取るには、やや問題が残るかも知れない。南都興福寺の別当・一条院(藤原実信)のもとを、光明院の僧正・覚遍が訪れたときの会話である。「人は皆、自分から望んで貧しくなる。分に過ぎたふるまいをするから出費がかさんで困窮するのだ」というのが、一条院の持論であった。それを聞いた覚遍が、「それなら、公務で朝廷に参上するとき、借り物の瘦せ馬に乗り、檜笠を被って行くべきだろうか」と言った。

それに対する返答の部分に、ダニが用いられている。最低限願望の意味としてこれを解するならば、「せめてそのようにだけでも今すぐなさいませ。そうすれば、よもや不如意にはならないでしょう」といったふうになる。しかし、「せめてもの願い」の云い方と、「よも」の表わす不生成確信性の意義とが折り合いにくいという点で、意味としては、少し落ち着かなさが残るように思われる(「おはす」の活用はサ変説が有力であるが、命令形には「おはせ」の形で用いられることが多いとされるので「松村明編『日本文法大辞典』による」、形の面での問題はなさそうである)。

注意されるのは、梵舜本ではこれが仮定条件句での用法となっていることである。

- ・(旧・四二二)《ヤガテ沙汰ニモオハセバ、ヨモ御不足アラジ》(巻十本・八…証月房久「之の誤りかとされる」遁世事)(因みに古活字本でも、《ヤカテ左タニモオハセハヨモ御不足アラシ》(四二六・左・四)とあって、仮定条件句での用法となっている。貞草本も同様(三六七))

「沙汰ニモ」は「さだにも」の宛字であるとされる(頭注)。これだと、「今すぐそのようにさえないされば、よもや不如意にはならないでしょう」となつて、後続部分とのつながり方は、はるかに自然である。経済的な困窮を避けるためには、贅沢を慎みさえすればよいという立言は、一条院の持論ともよく合致するであろう。米沢本では、そのような条件を「せめてもの願い」として示すことになつて、この点にやや「そぐわなさ」が感ぜられるように思われる。この例は、形の面から願望表現と共に用いられるものに繰り入れはしたが、右のような問題のあることに意を留めておきたい。

こうして、①は時代的な隔たりの面から鎌倉期の用例とすることはできず、②は意味や本文の面から、最低限願望を表わす例とするには問題が残ることになる。この時期のダニをめぐっては、夙く加納協三郎氏によつて、『未確定事実叙述語連続』(文献①、一六五頁。願望表現や仮定条件句での用法)での使用が少なく、その少ない例も仮定条件句での用法に限られることが指摘せられている(文献①、同。特に挙例されているのは著聞集・沙石集・愚管抄の三つである)。はじめにも記したとおり、加納氏の依拠した資料は貞享整版本ではないかと察せられるが、米沢本によつて調べてみても、この結論自体を修正する必要はないと言えよう。

もつとも梵舜本には、命令文で用いられた、次のような例が見える。

- ①(旧・二七九)《アノ御房、汗ラダニ拭給ヘカシ》ト、イハレテ、彌臆シテ、頭ノ煙モ立マサリケリ。》(巻六・一三…説法セズシテ布施取タル事)

この当時(十三世紀末ごろ)にあつても、最低限願望の用法が全く減んだとまでは言い切れないことを示していよう。

第二に、仮定条件句で用いられたダニは、三例を挙げることができる。一般に仮定条件句で用いられるダニは、その接する語句が、想定される他の大きな要素から大きく引き下がったものであることを示し、それによつて、後件成立のための要件が、そのような小さなものであつても十分であ

ることを表わす。いわば「最低十分条件」とも呼ぶべきものを構成するのに参加すると言えよう。(相対的輕少性)の意義がそのように發揮されるわけである。そのことは、次の第一・二例についても、十分にあてはまるであろう。

- ① (三八)《『思ひ立ち候はば、天竺へ安穩に渡りなむや』と申し給ひければ、「我だに守らば、などか」とこそ仰せありけり。》(卷一・五・慈悲と智とある人を神明も貴び給ふ事)〔旧・七〇〕〔古・一七・右一／頁・一三〕

- ② (二六四)《伏見修理大夫俊綱、月の夜、歌仙寄り合ひて会のありけるに、田舎の夫(ぶ)の、宿直しけるに、「やれ、歌と云ふ事は知れるか。歌詠めかし。暇とらせむ」と、等閑にいへば、「暇だに給はるべくは、案じ詠みてこそ見候はめ」と云ふを、》(卷五末・二・人の感ある歌)〔旧・二三三〕(頭注によると、この話は、米沢本・元応本・阿岸本・内閣文庫第一類本巻末付加部分にのみありとされる。但し、旧大系にも見える)

- ③ (二九三)《ある人、母に後れて、しばしだに忘らればこそ慰まめ面影ばかり憂きものはなし》(卷五末・六・哀傷之歌の事)〔旧・二四八〕〔古・二三一・左・六／頁・一九六〕

①は、明恵上人が天竺へ渡ろうとしたときに、春日明神から止めるようにとの託宣があったが、そのときの明恵と明神との問答である。「心にしっかりと決めておけば、無事に渡れるでしょうか」との問いに対して、「明神である私さえあなたを守っていれば、どうして無事に渡れないことがあるう」とのお答えがあったというのである。彼が恙なく印度まで渡るためには、春日明神が庇護するという、ただそれだけのことがあれば十分だ——そういった意味合いを表わすのに、(相対的輕少性)の意義が供されていると言えよう。

- ②は、伏見の山荘で名高い俊綱(今鏡)が、歌会のあとで、宿直番の男

に「歌を詠んでみろ。いいのができたら仕事を免除してやるぞ」と戯れに声をかけたところ、その夜いばんの秀歌を口にしたという話の一節である。男は、「休暇さえ頂けるのでしたら、詠んでみましょう」と答えている。自分が歌を詠むということが成り立つために必要な条件を、「休暇がもらえる」という僅かな一点へと絞り込むのに、ダニが用いられている。そのような形で(相対的輕少性)の意義が發揮されるのだと言えよう。

他方③は、『新拾遺和歌集』に、初句「時のまも」の形で収める(卷十・哀傷、八六〇)。詞書は『浄土寺入道前太政大臣かくれ侍りて後よめる』であり、作者は『前大僧正公豪』である(以上、新編国歌大観による)。小学館の頭注によれば、作者は三条左大臣実房の子であり、先に身まかった前太政大臣は兄の公房のことだとされる。歌意は「ほんの少しの間だけでも忘れることができるなら、心が慰むこともあるが(しかし片時も忘れられないので、(亡き人の)面影ほど苦しいものはない)」といったものであろう。

この歌の場合、最低十分条件を表わすと見るならば、自分の心が慰むということが成り立つためには、「ほんの暫くだけでも忘れる」という要件が満たされるならば、それで十分だといったふうになるが、そう解するのにはいささかの躊躇いが感ぜられよう。「しばしだに」は、本来の本文「時の間も」がそうであるように、単に譲歩的な「断り書き」ではないかという思いを禁じ得ないからである。そうした意味で、姑く疑いを存しておきたい。なお、梵舜本では、仮定条件で用いられたダニとして、次のような例をも寓目し得た。

- ① (旧・二八〇)《御聴聞ダニアルマジクハ、説法仕テ供養セム》(卷六・一三・説法セズシテ布施取タル事。小学館では項目名のみあって本文がない)

- ② (旧・二八〇)《イヤ／＼叶候ハジ。御聴聞ダニ候ハ／＼トテオリヌ。》

(同)

③(旧・二九一)《サラバ、地獄ダニモナクハ、功德ヲシテ要事ナシ。

(後略)》(巻六・一八…袈裟徳事)〔小学館は対応する話がない〕

④(旧・三四八)《我ハマ、ヨリサキニ心エタルゾ。ナシニサカシク教

ト、ノ給ヘバ、御心エダニ候ハバ、其コソ心安ク思ヒ参ラセ候ヘ

トゾ云ケル。》(巻八・一二…姫君事)〔小学館は対応する話がない〕

先に掲げた米沢本の三例はすべて対応例が見られたし、願望表現・②の例も梵舜本では仮定条件の形を取っていたわけだから、仮定条件句で用いられるダニは、梵舜本には少なくとも八例存することになる。この種の用法は、『十訓抄』にあつては、三十二例中七例と、やや活発な使われ方が見られたが(文献⑩、一〇一頁)、梵舜本においても、おそらく同様の傾向が認められるということになるかと思われる。

第三に、否定述語とともに用いられるダニは、準否定的な解釈の可能性を帯びるものも含めれば、三例見える。一般に否定述語とともにある場合、ダニは、その接する語句を、それをしも斥けるべき小さな要素として示しつつ否定と組み合わせることで、最終的には「皆無性」の表現に参加すると言えよう。《相対的輕少性》の意義においてそれがなされるわけである。そうしたあり方は、左の第一・二例についても十分に認められよう。

①(三〇四)《禪者も、教門の義理、甚深なるを、一宗をだに弁へずして、教門を賤しとて、すずろに誇る、その失(とが)大なるべし。》(巻末五・七…権化の和歌翫び給ふ事)〔旧・ナシ。二五五頁〕(古・二三八・左・五／頁・二〇三)

②(四七〇)《(前略)この子、ただ一人候ふが、『父よ、魚食はん』と申して、取り付きて泣き候ふに、『やれ、未だ煮えぬぞ』とて、心み心み、ただ独り食ひて、この子に給ひ候はず。まして、わらはには思ひだに寄らず候ひき。》(後略)》(巻九・一二…慳貪なる百姓の事)〔旧・三〇八〕(古・三三三・右・四／頁・三〇四)

③(二九四)《子息達、鎌倉を立ち給ひける朝、孫の十一歳の少人の歌

に、名は受け給はらず、亡き人の煙となりし跡をだになほ別れゆく今日ぞ悲しき〔歌道の〕家の事にて、哀れに侍り。》(巻末・六…哀傷之歌の事)〔旧・ナシ。二四九頁。拾遺の部に収める。四九二頁〕(古・貞にも見えない。(二三二)／一九七頁)

①は、文字による教えも、文字によらない禪も、ともに必要だと説く文章の一節である。ここでは、禪者が無学なままに他の宗派の教えをけなすことを難じている。この世には色々な宗派や教義があるのに、どれ一つ知らないままに教えを譏るのは、大きな間違いだというのである。「一」が自然教で最も小さな数であることは縷説を要しない。ダニはそのような要素を掲げつつ否定と組み合わせることで、教義をめぐる「知識の皆無性」を表わすのにはたらくと言えよう。

②は、吝嗇な夫が、鮎を三十尾も獲ってきたのに、妻子にはまったく与えなかったことを訴える妻の言葉である。たった一人の子供にも与えないのだから、まして自分が貰えることなど思いも寄らないのである。「思ひ」は単に頭の中に浮かぶだけのものであり、その現実に対して持つ重みは、実際の事柄に較べれば、極めて小さい。ダニもまた、そうした意味での輕少性を明示することで、当該事象成立の全き不可能性を表わすのに加わると言えよう。文章全体の流れとしては、抑揚表現の後半部にあって、より高揚的な事柄を述べている。ダニによる「徹底的な成立不可能性」の表現によって、それがなされるのだと言えよう。

他方③も、「別る」の語を準否定的な言葉と見るならば、あるいはこのグループに撰することも出来なくはないかも知れない。大納言為氏(為家子息。一二八六年歿)が鎌倉で亡くなったあと、遺族たちが鎌倉を去るときに、孫にあたる人の詠んだ歌の紹介である。為氏の歿年は沙石集の成立年時(一二八三)よりも後であるため、『成立後の加筆であることは明らか』(頭注)との指摘も見られる。歌意は、「為氏その人が存命であれば何の不足もないはずだが、今となってはそれも叶わないのであつてみれば、

せめてその跡をなりとも共に過ぐす所としたいのだが、そんな儚い抛り所のようなものとさえも今は別れなければならず、その今日という日が悲しい」といったものである。小学館の訳文では《跡にまで別れていく今日は悲しいことだ》とあって、添加的(もしくは極限的)な意味合いで解されていると思われるが、「別る」ということを、「関係が無くなる」といったふうな、準否定的な意味合いに解するならば、「相対的軽少性」の意義の發揮されたものとして受け止めることも、できなくはないと思われる。「跡」は、本体としての現実に対してその形見のような名残であるに過ぎず、この点に、二次的な間接性が認められる。ダニもまた、そうした意味での軽少性を明示しつつ、それとしも「別れる」ことを言うことで、亡き人との「つながりの皆無性」を表わすのに加わる——そんな解釈のしかたも、あり得ようかと思われる。

二 類推表現(ダニの様相・二)

第四に、類推表現で用いられるダニとしては、十三例を挙げることができる。一般に類推表現で用いられるダニは、小なる要素においても事柄の成立を表わすのに用いられる。それによって、類推の基盤となる事柄(以下「基盤事態」)を形作るとともに、より大きな要因の場合には、「それにも増して」或る事柄の成り立つことを類推せしめる(以下「類推事態」)。「相対的軽少性」の意義がそのような形で發揮されるわけである。類推表現の形の面からは、次の三つに分かつことができる。

	基盤事態	類推事態	昂進性
a…典型的類推構文	○	○	○ 二例
b…準典型的類推構文	○	○	/ 八例
c…暗示的類推構文	○	△	/ 三例
(計 一三例)			

即ち、aでは、「基盤事態」と「類推事態」とが共に示され、かつそこで昂進性自体も「まして・況や」のような語句によって明示されるが、bでは昂進性明示はなされず二つの事態だけが示され、cでは「基盤事態」だけが示されて「類推事態」は読み手の理解に委ねられて暗示されるに留まる。以下では、こうしたありように沿って順番に見て行く。

まず、a…「典型的類推構文」を形作るのに参加するダニは、次の二例である。

- ①②(五一五)《末代は真実の道心ある人は少なくして、教行を学びながら、経釈の文(もん)にもかなはずして、往生をやすやすと思へり。是は志の浅き故なり。／世間に朝夕する事だにも、心疎略にして、たやすく覚ゆる事だにも、不覚もし、誤りもあり。況んや往生の大事、無始よりまだ達せず。誰かやすしと思はむ。》(卷一〇本・一…浄土房通世の事)《旧・三九八》《古・四〇二・左・三／頁三四六。但しダニは一例のみ》

①②は、お手軽な気持ちで往生のことを考えてはいけないむね説く一節である。「日常のごくありふれたことでも、疎かな気持ちで取り組むと失敗する。まして往生は成就困難な一大事だから、軽々に考えてはいけない」との趣意であろう。ダニは、成し遂げるに際しての困難を相対的に少なくとも備えない要素を掲げるのに用いられている。そこから、まして往生ともなれば云々といった類推義もまた導かれる。「相対的軽少性」の意義がそのようにはたらくのだと言えよう。先の三類から言えば、「況や」ともにあつて典型的類推構文を形作っている。

この例のばあい、二つのダニがあるのは、文章としてやや整わない感じがする。梵舜本では次のようになっている。

・(旧・三九八) 世間二朝サタノスル事ダニモ、心疎略ニシテ輒(たやす)ク思ヘル事ハ、不覚モシ、アヤマリモアリ。況往生ノ大事、無始ヨリ未ダセズ。誰カヤスシト思ハム。

姑く今は、「朝夕する事だにも」と言ったあと、それを言い換えて「心疎略にして、たやすく覚ゆる事だにも」と、もう一度言ったものと受け止めておくことにする。なお、次項 **b** の②の例にも、よく似た考え方に基づく言い回しが見える。

次に、**b**…〔準典型的類推構文〕に参加するダニは、次の八例である。

①(八二)《上代はかかるためしもあれども、末代は有り難くこそ覚ゆれ。夢にだにも不思議なるに、うつつに現じて助け給ひける利益の目出たさ、貴く忝し。》(巻二・四…葉師・観音の利益によりて命を全くする事)〔旧・九八〕〈古…五三・右・一〇／貞…四五〕

②(一九八)《急ぎ極楽へ参らんと思ひければ、入水して死なんと思ひ立ちて、舟を用意して、水海のありけるに漕ぎ出でぬ。この上人申しけるは、「臨終一期の大事なり。し慣れたる事だにも誤りもあり、不覚もする事なり。往生の大事、臨終の作法、未だ得ざる事なれば、いかがおぼつかなし(後略)》(巻四・六…入水したる上人の事)〔旧・一九二〕〈古…一八一・右・四／貞…二五二〕

③(三三二)《慚愧の心あらん人、祖師〔「竜樹」〕の戒めを思ふべし。拙き強盗だにも、この教へを聞きて、発心して、過(とが)を悔いさ。情けあらん人、などか心を発(おこ)さざらん。》(巻六・七…説教師の盜賊に値へる事)〔旧・二七七〕〈古・貞…なし〕

④(三四一)《この尼公、「浅猿く候ひけるかな。酒に水入るるは罪にて候ひけるを知らで」と云ひければ、「水の少し入りたるだにもよし、今日はいかに目出たからん」と思ふ程に、》(巻六・一一…能説房の事)〔旧・二八五〕〈古…二六六・右・一〇／貞…二二九〕

⑤(三八三)《果報拙くして、今まで御恩も蒙らねば、思出もなくて、年比日比過ごしつるだにも、心苦しく、片腹いたさに、我れゆゑわ御前さへ惑ひ給はんこそ口惜しければ」と云へば》(巻七・一一…君に忠有りて榮えたる事)〔旧・三八八〕〈古…二九六・右・二／貞…二五

五

⑥(五二四)《さて、弟の執行、「僅かに一期の楽しみなる執行をだにも、浦山しく思ひて、打ち取らんとしき。物を羨まんに取りては、世を通れ、臨終目出き程の浦山しき事やはあるべき」とて、兄の執行の息に執行をば譲りて、また遁世してんげり。》(巻一〇本・二…吉野の執行遁世の事)〔旧・四〇三〕〈古…四〇八・右・三／貞…三五一〕

⑦⑧(五五八)《譬ひ仏道修行の故に、命を失ふとも、何の歎きかあらん。多生広劫徒らにこそ捨てにしか〔「果てしなく長い間、徒らに生死を繰り返してきたのだし」〕、⑦また一期の僅かの身を助けん為、名を惜しみてだに、合戦の庭には命をば捨つる習ひぞかし。其は勲功を云ふにも、僅かの栄花なり。ある甲斐もなき事もあり。或いは悪し様に駆けて頭をはねらるる事もあり。今生猶その益なし。来世は云ふに及ばず。⑧一旦の我執名聞にだに、命をば捨つる習ひなり。仏道に捨てなば、仏の引撰(いんせん)にも預り、菩提の岸にも至るべし。徒らに捨てん命を、同じくは法の為に捨つべし。》(巻一〇本・八…証月房遁世の事)〔旧・四二四〕〈古…四二九・左・二／貞…三六九〕

①は、承久の乱で負傷した武士が、薬師如来や観音様の御利益によって命を長らえた話しの結尾部分である。このようなことは、仮に夢であつても不思議なことなのに、現実に見われてお助け下さつたためたさは、尊く有難い限りだとの意である。ダニは、「夢」というものを、ある事柄がそこに現われることの不可思議さを相対的に少なくしか備えない要素として掲げるのに用いられている。そこから、まして現実では云々といった類推義へと進んで行く。そうした意味で、準典型的な類推構文が形作られていると言えよう。

②は、入水を試みる僧侶が、死に際に妄念を抱いた場合は、結わえ付けておいた縄で合図するので引き上げてもらいたいむね伝える言葉である。ここでは、しなれた事でもやり損ねることがあるのだから、まして往

生臨終ともなれば、たいへん心配だと語っている。ダニは、心許なさをもたらず要因をより少なくしか備えない要素を掲げるのに用いられていると言えよう。それによって、類推の足場となる事柄が形成されるわけである。

③は、名僧を襲った強盜が説教を受けて逆に出家した話をふまえて、発心を勧める言葉である。ダニは、改心する心の素地をより少なくしか備えない要素を掲げるのに用いられている。そこから、まして心豊かな人は発心するのが当たり前だという類推義もまた述べられる。(相対的輕少性)の意義が、そのような形で發揮されるのだと言えよう。

④は、酒を売る尼が日頃酒に水を混ぜていたので、酒に水を入れて売るのが罪であることを説法で説いたところ、尼は水に酒を混ぜたのを進めたという話の一節である。ここでは、説法をした僧侶が尼の反省の言葉を聞いた時の思いを叙している。「水を混ぜてあつても美味なのだから、水の混じらない今日の酒は、どれほど芳醇な味がすることだろう」と胸を弾ませている。このあと、「いつもは水くさい酒なのに、今日は酒くさい水だ」という例のオチへと続く。おそらく無住は、そうした話柄を通じて、聴衆との共感形成に努めたのであろう。ここでもダニは、上質の味をもたらず要因をより少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。それによって、類推の基盤となる事柄が形成されるわけである。

⑤は、くじ引きによって主君に引き出物をしなければならなくなった貧しい侍が、出家をしたいむね、連れ合いに語る言葉である。これまで裕福な暮らしむきとは無縁に過ごしてきただけでも心苦しいたたまれないのに、そのうえ自分のせいで相手まで路頭に迷わせることになるのは悔しくてならないのである。ダニは、心苦しさをもたらず要因をより少なくしか備えない要素を提示するの用いられている。そこから、況して云々の類推義もまた展開すると言えよう。

⑥は、金峰山寺の執行の地位を兄が弟に譲って遁世したところ、弟もまた兄の子息に譲って遁世したという話の一節である。当時、金峰山の執

行の地位は、一門のうちの威勢のある者が武力で奪い取るという仕来たりになっており、弟も虎視眈々とそれを狙っていたわけだが、いざ譲られてみると、自分も兄と同じふるまいに出てしまった。そのときの心境が述べられている。僅か一期の楽しみにしか過ぎない執行の職でさえ欲しかったのだから、どうせなら、遁世して美事な臨終を遂げることのほうが、遙かに欲しがるに値するだろうというのである。ダニは、手に入れたと思う事柄のうち、相対的に価値の少ないものを掲げるのに用いられている。それを踏まえつつ、類推義もまた展開して行く。(相対的輕少性)の意義が、そのようにはたらくのだと言えよう。

⑦⑧では、仏道のためなら、命を捨てても構わないという考えを述べている。無住は生々流転の長い時間の中で人間を捉えており、そこから見ると、この世はごくごく短い期間であり、そこでの名聞栄花などはたかが知れているはずだが、そのようなものためであっても命を捨てるのが世の習いであつてみれば、まして真理のために命を捨てる場合には、どれほど大きな価値があることだろう、というのである。⑦⑧ともダニは、「命の捨て甲斐」を相対的に低くしか帯びない要素を示すのに用いられている。そこから、道のため云々の類推義もまた形作られる。(相対的輕少性)の意義が、そのように供されていると言えよう。

さらに、c…「暗示的類推構文」を形作るものとして、次の三つの例を挙げることができる。

①(一五四)《最愛の子息に遅れて、人の親の習ひと云ひながら、強ちに歎き悲しみけり。あたりの人も訪ひ哀れみけるに、この上人とはざりければ、女性の癖にて、「あらうたてや。これほどの歎きを上人のとはせぬよ。よその人だに情けをかけて訪ふ事までこそあれ」と云ひけるを、》(巻三・五・ある学生、在家の女房に責めらるる事)(旧・

一四八)(古・一二二・右・四/貞・一〇一)

②(二〇五)《余りに有り難く看病し、月日も経にければ、この病人申

されけるは、「仏法・世法の恩を蒙る年来の弟子だにも、捨てて侍るに、これ程に念比に看病し給へるは、然るべき先世の契りにこそとまで有り難く思ひ給へるに、いたく隠し給ふ事こそいふせけれ。抑も、いかなる人におはすぞ」(巻四・八…上人を女看病したる事)(旧・一八七)(古…一七六・右・三／頁…二四七。この例、古活字本の総索引には引照指示がない。注⑥参照)

③(五三五)《実の道に思ひ入りて、世間のあだなる理を知らば、何事に心を留め、いかなる縁にか障(さ)へらるべき。昔の大王は、国の位を捨て、一乗の御法を習ひ、菜摘み、水汲み、千歳の給仕をだにも、し給ひけるぞかし。僅かなる世間に心を留め、道に入る人の無き習ひこそ、まめやかに疎かなれ。》(巻一〇本・四…俗士、遁世したりし事)(旧・四一〇)(古…四一四・左・二／頁…三三七)

①は、我が子に先立たれたのに兄の僧侶が訪ねて来ないのを不満に思う妹の言葉である。「関わりの薄い他の人でも同情を寄せて訪ねてくれるほどののに、血のつながりのある人が来て下さらないとは、なんと冷淡なのか」との意であろう。悲しみの気持を察してくれることをめぐって、その度合いを相対的に少なくしか備えない要素を示すのにダニが用いられている。そこから、まして実の兄なら訪ねてくれて当然だといった類推義は容易に汲み取られるが、実際の表現ではそれとは反対の事柄が、それに先立つ部分に述べられている。そうした意味で、暗示的類推構文が形作られていると言えよう。

②は、長患いをして弟子達から見放された山寺の別当を、ある女性が親切に世話をしてくれるので、事情を訪ねようとする別当の言葉である。「恩義を蒙っているはずの弟子でさえ見捨てるのに、(見ず知らずのあなた)これほど懇ろに看病して下さるのは、どういうわけなのでしょう」との趣意であろう。懇切に面倒をみることの必然性をより少なくしか備えない要素を掲げるのにダニが用いられている。それによって類推の基盤と

なる事柄が形成されるわけである。「まして云々」の類推義は、ここでは自明のこととして踏まえられ、それと背反する事態のほうが述べられている。そうした意味で暗示的類推構文としてのありようを見て取ることができよう。

③は、この世の瑣事に囚われることの無益さを説くものであり、ここではお釈迦様が富貴な身分を捨てて法華經の教えを習い、給仕役のようなことさえも厭わなかった事例を引き合いに出している(注⑤)。小学館の訳文は《長い年月に渡る給仕までもなさったのである》とあって、添加(もしくは極限)的な意味合いに解しているが、これを暗示的類推構文と取ることも、できなくはなからう。かつて国王であった人にとって、誰かの給仕役(奴隷役)を努めるというのは、進んで行ないうる要因を最も少なくしか備えない事柄であり、そうした意味で軽少要因性を備えるのではないかと思われる。そこから導かれる類推義は、「まして、(通常の身分の人間が)単に世を捨てることぐらいなんでもないはずだ」といったふうになる。実際の行文ではそれは詠み手の理解に委ねられて示されず、それと背反する事柄のほうが述べられている。そうした意味で、暗示的類推構文が形作られていると捉えることも許されようかと思われる。

なお、梵舜本では、類推表現に参加するダニの例として、次のようなものを寓目し得た。

①(旧・二七九)《人ニカ、セテ、如形(形の如く)ヨミツケタレバ、本二向テダニ、ハカドシカラズ。マシテソラニハ、一句モ可申(申す可く)モノクテ、布施計取テ出デヌ。恥ニハ人ハ死(しな)ヌ物ニテ侍リケリト、其座ニテ見タル人、物語侍リキ。》(巻六・一三…説法セズシテ布施取タル事)(小学館…項目名のみ。説話なし)

②(旧・三六〇)《如夢僧都ハ大井河ノ御幸ニ、三衣箱ノ底ニ、烏帽子ヲダニモ用意シテ、和泉ノ大將ノ烏帽子ヲ、河風ノ水ニ吹き入タリケル時、取出シテ高名シ給ケルトコソ、申伝ヘ侍シ。マシテ人ゴトニ、

可行（行く可き）道ノ支度ハ、賢人モ用意ノナキコソ、マメヤカニ愚ナレ。》（卷八・二二…死道不知人事）〔小学館…《烏帽子を用意して》四二五頁〕

③（旧・四二四）《マメヤカニ心清クシテ、道ニ志アル人ヲ見ルニハ、慈悲ナク愚ナル我等ガ心ニダニモ、アハレ助バヤト覺テ、随分ノ力モ入レ侍リ。マシテ仏法修行ノ仏弟子、如法ニ行ゼバ、我眼晴ヲ守ル如クマモラムト、仏ノ御前ニテ誓ヲオコセバ、諸天・善神・日月・星宿等、世界ニミチミテリ。ナドカ其本誓空カラム。》（卷十本・八…証月房久「之」の誤りであろうとされる）〔通世事〕〔小学館…《慈悲なく愚かなる我等が心にも》五五八頁〕

④（旧・三五四）《風早ノ唯蓮坊ノ許ヨリ」ト云。船人極テ詞ヲイム習ニテ、「アライマ／＼シ。風早ト云ダニモイブセキニ、唯蓮坊、彌々恐ロシ。サリトテハ、船賃ナムド、モタヌゲナル御坊ノ、口ノワルサヤ」ト云ヘバ、》（卷八・一九…便船シタル法師事）〔小学館…説話なし〕

⑤（旧・二九〇）《経ノ中ニ、「金ノナキ国ニハ銀ヲ宝トシ、銀ノナキ国ニハ銅ヲ宝トシ、乃至白鐵マデ宝トス。如是（是の如く）、得道・〔得〕定・持戒（ノ）比丘無ラム国ニハ、有戒・無戒ヲエラバズ、形ノ似タルダニモ崇ムベシ」ト見エタリ。》（卷六・一八…袈裟徳事）〔小学館…《形似たるをも》三四八頁〕

①②③は典型的類推構文、④は準典型的類推構文、⑤は暗示的類推構文と見られよう。これらの例も、ダニの性質自体は、米沢本のそれと異なるものではないと思われる（②は類推事態の代わりにその背反事態が掲げられているが、「まして」の現われる点に鑑みて、姑く典型的類推構文に含めることにした）。

以上の検討から、この文献におけるダニは、概ね〈相対的輕少性〉の意

義を保っていることが認められてよいであろう（注⑥）。

では、そうした中であつて、サヘの〈周縁波及性〉の意義やダニの〈把同的極限性〉の意義はどのようなものか。また、この文献ではスラの用例が比較的多く見られるが、それはどのような事情に依るのか。次に、こうした問題についても、考察の歩を向けなければならない。

三 サヘ・スラの様相

『沙石集』には、サヘが三例見える。

①（四七）《夢の中に申しけるは、「我こそ御計らひも無からめ、よその御恵みをさへ御制のあるこそ、心得がたく侍れ」と申せば、》（卷一・七…神明は道心を貴び給ふ事）〔旧・七六〕〔古・二四・左・五／頁一九〕

②（八八）《有望な弟子は》年十九に成りけれども、灌頂をもゆるさず、「自分自身は」老耄の上に病さへ日々にかさなりければ、伝法の空しからん事を歎き思ひて、》（卷二・五…地蔵の利益の事）〔旧・一〇二〕〔古・五八・右・五／頁四九〕

③（三八三）《果報拙くして、今まで御恩も蒙らねば、思出もなくて、年比日比過ごしつるだにも、心苦しく、片腹いたきに、我れゆゑわ御前さへ感ひ給はんこそ口惜しければ」と云へば、》（卷七・一一…君に忠有りて栄えたる事）〔旧・三八八〕〔古・二九六・右・三／頁二五五〕

①は、日吉神社の靈験がなかったため、伏見稲荷で「一千石」のお告げを貰ったが、日吉大明神の意向で、それも取り消された人が、抗弁する言葉である。「日吉大明神が自分の御利益を下さらないのはしかたがないとしても、お稲荷さまのお恵みまで止めようとなさるのは納得できない」と言うのである。本来の統御範囲から、それを外れるものへという点に、周

縁波及的な添加のありようを認めることができる。

②は、八十歳を越えた老僧が、老齢に病も加わって、伝授のできなくなりそうな様子を述べている。老化は誰にでも起こることだが、病氣は罹らないですむばあいが無いとは言えない。そうした意味で周縁波及的な添加がなされていると言えよう。

③は、くじ引きで主君に対する贈り物の役の当たった貧しい侍が、出家せざるを得ない事情を連れ合いに語る言葉である。「今まで甲斐性が無かったことだけでも心苦しいのに、（贈り物の出費のために）お前まで路頭に迷わせるのは残念でならない」というわけである。日常的な不如意に加えて偶発的なそれが上乘せされるわけであって、そうしたありようにおいて《周縁波及性》の意義が発揮されているありさまが窺われよう。

以上の検討から、『沙石集』に現れるサへは、《周縁波及性》の意義を保つと認めてよいのではないかと思われる（注⑦）。

次に、スラの検討に移る。『沙石集』には、スラが八例見える（注⑧）。同じく説話集といっても、『宇治拾遺物語』や『十訓抄』には全く見えず（文献⑨⑩）、『古今著聞集』でも三例（文献⑪、一二二頁）といった状況を考えれば、これはやや多い数値だと言わねばなるまい。それらはすべて類推表現に参加し、類推の基盤となる事柄を形作る役割を担っている。

そうした表現にあってスラのしていることは、極限的な要素の提示ということであろう。この語の接する項目内容が、想定される他の様々な事項との間に同質性を保ちながらも、そのあり方を背負うものとして最も極限的な位置を占めることを、自身の意義において示すのが、スラなのではないかと考えられる。そうした意味で、この語の基本的意義を《把同的極限性》と呼ぶことも許されよう（注⑨）。この意義に基づいて類推の基盤となる事柄が形成され、類推義もまた、それを踏まえつつ展開されることになるわけである。

類推表現のあり方をダニの場合にならって三分すると、その内訳は次の

ようになる。加納論文では、スラの多い理由を漢文訓読的な語法という点に求めている（文献①、一六九―一七一頁）ので、以下では、この語の用いられる位相面にも留意しながら用例を見て行く。

a…典型的類推構文 六例

b…準典型的類推構文 一例

c…暗示的類推構文 一例

〔計 八例〕

まず、a…「典型的類推構文」を形作るスラは、六例見える。ダニの場合は、この種の構文をなすものは二例であったが、スラではこの使われ方が大半を占める。また、昂進性明示の言葉は、すべて「況や」が用いられている。こうしたことも、訓読文的な性質ということと無縁ではなからう。

①（九二）《釈尊も三乗根性の熟せるを待ちて八相の化儀を示し、弥陀も念仏衆善の功つもれる冥目の刻みこそ、三尊の来迎を乗じ給へ。この菩薩（「地蔵菩薩」、機根の熟するをも待たず、臨終の夕べとも云はず、鎮（とこしな）へに六趣の衢に立ち、旦暮に四生の族に添うて、縁無き衆生すら尚助け給ふ。夷にも見え給ふとかや。況や一沙一塵の善根もあれば、これを縁として八寒八熱泥梨（ないり）の苦患（くげん）を助け、人中天上諸仏の浄土へ送り給ふをや。》（巻二・五・地蔵の利益の事）（旧・一〇四）（古・六一・右・五／貞・五二）

②（一三四）《普賢の十願は菩薩の通願なれば、恒順衆生の願は、一切衆生に常に随ひ添ひて、方便教化せむとなり。常随仏学の願は、諸仏に随逐して仏道を学せむとなり。然れば身をあまたに分ち、六道四生の無縁の衆生にすら付き添ふべし。況んや有縁をや。》（巻三・一・癡狂人が利口の事）（旧・一三七）（古・貞ともスラは見えない）

③④（二三五）《諸悪莫作といつば、ただ悪を作らざるのみにあらず。有相の善をも成す事勿れとなり。衆善奉行と云ふは、終日（ひめもす）に善を行ずれども行ぜずして、不行の処にも住せざる、これ実の奉行

なり。天台の師云く、「真の無生の人は、③福をすら猶なさず。何に況や罪をなさむや」といへり。古の大賢、子を戒めて云はく、「汝、慎むで善をなす事勿れ」。子の云はく、「寧ろ悪を作るべけんや」と。父の云はく、「④善をすら成すべからず。況や悪をや」。これ仏祖の大意、賢聖の通儀なり。(卷五本・五…学生の怨心を解きたること)(旧・二二二)〈古…二〇六・左・六、八／頁…一七三〉

⑤⑥(五八一)《天台の云はく、「真の無生の人は、⑤福をすら作らず、況んや罪をや」と云へり。大智度論に、「問ひて云はく、『菩薩、実相に住する時、一法も得ず。戒を破るべしや』。答へて云はく、『実相に住するを以ての故に、⑥福をすら作らず。況んや罪を作らんや』と云へり。》(一〇末・一一…霊の託して仏法を意得(こころえ)たる事)

(旧・四三九)〈古…四四五・左・五／頁…三八三。古活字本・貞享本とも、⑤に対応する例だけが見え、「ソラ」の形を取る。注⑩参照〉

①は、地藏菩薩の御利益を説く言葉である。お釈迦様や阿弥陀様に較べて、お地藏様による救いが遙かに広大で無条件的であることを述べている。どんな時にでも常に寄り添って、仏道とは無縁の衆生であっても、それでもなおかつお救いになるのだし、ましてほんの少しでも善根があればどんな地獄にいても助け出して人間界や天上界・浄土などへ送り届けてくれるのである。スラは、救われるということにとって最も縁遠い要素を掲げるのに用いられている。この点に「把同的極限性」という、この語の基本的意義の發揮されるありさまが觀察されよう。「況や」云々の類推義も、それに基づいて展開されるわけである。

文章の位相としては、漢語を駆使しつつ教理を論説的に説く部分に現われている。「三乗根性、八相の化儀、念仏衆善の功、冥目の刻み、三尊の来迎、六趣の衢、四生の族、一沙一塵の善根、八寒八熱泥梨の苦患、人中天上諸仏の浄土」等々の用語を見れば、そのことは明らかであろう。そうした環境において、スラもまた用いられるわけである。

②は、普賢菩薩が万人に付き従うことを説いている。恒順衆生とは、普賢十願の一つで、常に一切衆生に付き従ってそれを教化せんと願っている。そこで我が身を無数に分ち、無縁の衆生であってもなおかつ付き従うのだし、まして有縁の衆生に付き従うこと論無しだということである。ここでもスラのはたらき方は、右と同じだと言えよう。用いられる位相が議論文である点も同様である。

③④は、「諸悪莫作」「衆善奉行」の解義をした一節である。「無生の人」とは、「一切空の法を悟った人」のこととされるが(頭注)、そういう人は(罪は無論のこと)功德善行であってもなおかつなさいということが智顗によって説かれているし、また昔の大賢は我が子に向かって、「(悪は勿論のこと)善であってもなおかつ、行なつてはならない」と論じたというのである。ここでのスラは、いずれも、(常識的な見地に立てば)禁止される事柄としてもっともふさわしくない要素を掲げるのに用いられている。それでもなおかつ禁ぜられるという点に、「把同的極限性」の意義の發揮されるありさまが見て取られよう。文章の位相としては、論説的な部分に用いられていると認められるであろう。

⑤⑥でも同じ事が言える。ここでは「福をすら」の云い方が二度現われるが、それは③の例と殆ど変わらない(但し、⑤⑥とも「すら」の部分が底本では「すて」であるむね、頭注に記されている)。論説的な位相であることも同じであろう。

次に、b…「準典型的類推構文」を形作るものとしては、次の一例が挙げられる。

⑦(三〇九)《人間勿々として、冥途の近付く事をも知らず。眼前の夢中の事をのみ當みて、身の後のまことの道の糧をつつまざる事、静かに思ひとくに、悲しくこそ待れ。富貴にして、騒がしからむすら、よしなきに、貧賤にして、閑なる事なき世間のならひ、誠に人間の思ひ出(いで)なく覚え侍り。》(卷五末・七…権化の和歌翫び給ふ事)(旧・

二五九〕〔古…二四二・右・七／頁…二〇六〕

⑦は、この世に汲汲とすることの非を説いている。「富貴な身で騒がしいのであっても、それでもなおかつ詰まらないことなのに、まして貧賤の身で静かにできない世の習いは、いかにも良い事がないと思われます」との意であろう。富貴な身分であれば、社会的な職務等々の関係から世事に慌ただしくなるのも万やむを得ない点があるが、貧賤の境遇であれば、そうした煩いはないのだから、せめて世の喧噪を離れて心穏やかに暮らせるのではないか——この文章にはそういった価値観が背在するのであろう。そうした見方に立てば、スラは、世事にかかずらうことの無意味さというものから最も遠い要素を掲げるのに用いられていると見ることができる。

〔把同的極限性〕の意義がそのようにはたらくわけである。

「侍り」が現われるため、位相としては、これまでの例と些か肌合いを異にするように見えるかも知れない。実際この部分は、前半の五巻全体を締め括る位置にあつて、無住が自身の懐く思いを直截に述べるところであり、このあと、かつて出家したときの心境も語られ、自作の詠歌も披露される。しかし、そこに一貫するのは「この世に囚われることの無意味さ」ということであり、それが論説的に展開されていると見ることもできる。

現にこの部分は《凡そ、三界の流転、四生の沈淪、ひとへに一念の妄心によて、六塵の幻境を迷へるによる》(三〇九頁)といった一文に始まり、《故に論に云はく、「有念は即ち生死、無念は即ち法印」と云へり。まことなるかなや、このことば》(三一〇頁)という『大智度論』の取意とみられる文言で終わる。こうした点を意を留めれば、この部分にもなお、教理の論説的な説論といったありようを認めることができるであろう。

最後に、c…〔暗示的類推構文〕を形作るものとしては、次の一例が挙げられる。

⑧(四二二)《この道人、「万法の因縁仮にして、執心あるべからず。在家の人の中にすら、かかる心持ちあり」と、慚愧の心発りて、諸法の

因縁、幻化虚妄の事を便りとして、すなはち、仏法を悟りにけりとぞ。》

(巻八・四…老僧の年隠したる事)〔旧…三五七〕〔古…三二六・左・九／頁…二七四〕

⑧は、息子が死んだのにその父親は一向に嘆かず、その母親も奥さんも平気な顔で食事の用意などをしていたのを見て、道人の発した言葉である。「在家の人であつても、それでもなおかつ執着心に囚われない人が居る」との意であろう。生業のために日々に慌ただしい生活を送る在家の人というのは、この世に執着心を持たないということにとって、最も縁遠い要素であると言えよう。スラはそのような要素を掲げるのに用いられている。この点に、〔把同的極限性〕の意義の供されるありさまが見て取れよう。そこから展開される類推義は、「まして出家をした人間であれば、執着を持たないのが当たり前だ」となるが、それは自明のこととして、読みの理解に委ねられていると言えよう。

位相はと言えば、この章段自体は説話を紹介する記事文であるが、この言葉を(心中思惟としてではあるが)発した人は《仏法求むる道人》(四二〇頁)であり、且つ、その人の世界了解の仕方を言い表わすものなのだから、これまでに見てきた仏教的な論説の位相と、質的には同じいと見ることも許されるであろう。

以上の検討から、この文献におけるスラは、〔把同的極限性〕の意義において類推表現に参加しているありさまが観察されると言つてよいであろう。そして、その用例数の多さについても、漢文訓読的な位相ということが大きき要因になっていると認められよう(注⑩)。

むすび

以上、『沙石集』からダニ・サヘ・スラ三語の用例を取り上げて、その使われ方を観察してきた。それによって明らかになったことをまとめる

と、おおよそ次のようになる。

第一に、願望表現での用法は二例見られたが、一例は古今歌の引用であったし、他の一例も、梵舜本との対照からは、やや問題の残る例であった。かつて加納協三郎氏は、著聞集(歌の例を除く)・沙石集・愚管抄などでは願望表現での用法が見られないと述べていた(文献①、一六五頁)。氏の調査は流布本系の本文に依ると思われるが(注①)、米沢本によっても、ほぼそれに近い結果が得られるということになりそうである。しかし梵舜本(旧大系)にまで目を広げるならば、この用法も皆無とまでは言い切れないのであった。

第二に、仮定条件句での用法は三例が見られた。加納氏は、そのいわゆる「未確定事実叙述語連続」(同)について、著聞集・沙石集・愚管抄などでは仮定条件を示すもののみであり、しかもその数の極めて少ないと指摘している(同前)。米沢本による調査によってもそのことは確かめられるが、この用法は、『十訓抄』では七例とやや活勢が認められるし(文献⑩、一〇一頁)、梵舜本でも、それに匹敵する用例数が見出される。鎌倉期におけるこの種の用法の衰微を言うには、なお慎重でなければならぬであろう。

第三に、否定述語での用法は少ないが、類推表現での用法は多く、二十一例中十三例を占める。「未確定事実叙述語連続」に代わって「既定事実叙述語連続」が《普通の用法》になるとする加納氏の指摘(同)は、この文献においても確かめられると言えよう。

第四に、サへの用例数は少ないが、『周縁波及性』の意義を保っていること自体は認められてよいであろう。

第五に、スラが《把同的極限性》の意義において用いられ、その「多さ」の要因が漢文訓読的な位相にあることも、確かめられるであろう。

この文献での「ダニ・サヘ・スラ」は、以上に見てきたような意味において、それぞれにその基本的意義を保っていると考えてよいであろう。「ダニ

については、一概にそうは言い切れないかも知れないものも、若干の例が見られた(願望表現の②、仮定条件の③、否定述語の③、類推cの③など)。そうした事例をどのように捉えるかということについては、他の諸文献での調査とも併せて、今後の考察に俟たねばならない。

〔付記〕米沢本『沙石集』の本文は、次の文献によった。

新編日本古典文学全集『沙石集』(小島孝之 校注・訳 二〇〇一 小学館)

梵舜本・古活字本・整版本の本文は、それぞれ次の文献に依った。

(旧) 日本古典文学大系『沙石集』(渡辺綱也 校注 一九六六 岩波書店)

『慶長十年古活字本 沙石集総索引』(深井一郎 編 一九八〇 勉誠社)

『校註 沙石集』(井上松翠 編 頼原退蔵 校訂 一九三三 平楽寺書店。ただし本稿では、一九四三年の再版本を用いた)

これらの書物の引照に際しては、「小学館」「旧大系」「総索引」「貞享本」等々の略称を適宜用いた。用例の掲出には、次のような行き方を取った。

・用例の頭に頁数を示した。

・末尾に〔巻・標題番号・標題〕を示した。

・梵舜本に対応例のある場合には、〔旧・二四八〕のように、その頁数を示した。

・振り仮名を()に括って示した場合がある。

・漢文風の書き方になっている箇所も、書き下し文を()に括って示し、返り点は之を省略した。

・引用者による注解を()に括って適宜挿入した。

・古活字版や整版本に対応例のある場合には、〔古・二三一・左・一／頁・一九六〕のように、丁数・左右・行数や頁数を更に続けて示した(古活字本については索引の引照方式に倣った)。

・旧大系で歴史的仮名遣いの傍書されているものは、それに従った。

注

(注①) 文献①では、加納氏の調査依拠資料は「平楽寺書店本」と記されている(一五六頁)。おそらくこれは次の書物を指すのであろう。

・『校註沙石集』(井上松翠・編。頼原退蔵・校)(一九三三 平楽寺書店)

この書物の底本は「貞享三年開版片仮名本」である(冒頭凡例。ただし、印行に際しては、平仮名に改める等の改変が施されている)。また、仮にこの本に依らなかったとしても、加納氏の引用は、巻六や巻九、巻三のものも「上・下」を区別しているので(一五五頁、一七〇頁。ただし巻一の分は区別が記されていない。一六五頁、流布本系であることは恐らく間違いないであろう。

(注②) 文献①では、次のようなマデの用例を引きつつ、『マデは既に鎌倉期に於て(中略)その極限をあげて他を類推せしめんとする用法が見られた』(一五五―六頁)といった見解が述べられている(他に「日蓮聖人真蹟御遺文」からも一例が引かれている)。

・(貞・二二一)《学問までもやめ給へり。況や世間の事をや》(巻六上…説経師之強盜令発心事)
・(貞・三七三)《実の道に入時は法執として仏法を愛するまでも道の障也。まして夢幻の世のまつりごと、心にかくるにもたらぬ事を常は思つゝけむ。争か観念の心も乱れざらん》(巻九下…依妄執魔道落人事)

しかるに、これに対応する米沢本の本文は次のようになっていて、第一例では「まで」は見られず、第二例では「まして」の語を欠く。こうしたことも、米沢本による再調査の必要ことを示唆しているように思われる。

・(三二八)《学問をも制し給へり。況や余の世事をや》(巻六・七…説経師の盜賊に値へる事)
・(五六三)《実の道に入る時は、法執とて、仏法を愛するまでも、道

の障りなり。夢の世の仇なる政事心に掛くるにも足らず。いかでか観念の心も乱れざらん》(巻十本・十…妄執に依りて魔道に落つる人の事)

なお、文献②では、同じような考え方から、『保元物語』の再調査を「半井本」に基づいて行なっている。

(注③) 加納氏の調査によるダニ・サハ・スラ三語の用例数を、本稿でのそれと並べて掲げると、次のようになる(文献①・一六七頁の表による。加納氏は歌とそれ以外の用例とを分けて掲げている。左のダニ・十八例は、和歌二例を加えた数である)。

	ダニ	サハ	スラ	依拠資料
加納氏	一八例	三例	八例	平楽寺書店本
田中	二二例	三例	八例	新編日本古典文学全集

なお、梵舜本でのダニの用例数を寓目し得た限りに示すと、次のようになる(米沢本のものと一緒に掲げる)。下段の括弧内は、米沢本に対応する例と、固有例との数を示す。

	〔米沢本〕	〔梵舜本〕
1…願望表現	二例	二例(一+一)
2…仮定条件	三例	八例(四+四)
3…否定述語	三例	一例(一+〇)
4…類推表現	一三例	一七例(一二+五)
	〔計二二例〕	〔計一八例(一八+一〇)〕

米沢本二十一例のうち、梵舜本と対応するのは十八例であって、他の三例は梵舜本との対応を見ない。また、梵舜本のほうでも、固有例は(寓目し得た限りで)十例を数えることになる(サハやスラについては、梵舜本の固有例は寓目していない)。

(注④) 古今集のダニについては、文献④で論じている(当該歌については、一五二頁)。

(注⑤) この挿話は『法華経』(巻五「提婆達多品」)に基づくとされる。岩波文庫の当該部分によれば、お釈迦様は、王位を捨てたのち、すぐれた教えを授けてくれる人がいればその人の奴隷になると布告したところ、あ

る聖仙に出会つてので、その奴隷役を務めて倦まず、ついに仏になったとの由を自ら語っている（岩波文庫『法華経 中』、二〇四—二二一頁）。

〔注⑥〕 総索引によると、古活字本では、ダニは二十例が存することになっている。そのうち十六例は米沢本との対応例である。残る四例を掲げると次のようになる（引用文は古活字本のもの。古活字本では「始／終」によって、巻の「上／下」を示している。貞享本は対応する頁数のみ掲げた）。

①（古…二七一・右・四／貞…二三四）《コノ師子男子タニモ見レハニケテカクル。僧ニハチカツキテヲナス》（巻六・始…袈裟徳事）〔小学館…《師子、僧に慣れ近づく事なれば》。三四六頁〕

②（古…三六九・左・二／貞…三三〇）《シラヌタニ自ラ如シ此。マシテ信シアカメテモタランヲヤ》（巻八・始…愚痴之僧成牛事）〔小学館…《自ら知らざる、なほ益あり》。四八二頁〕

③（古…四三二・右・六／貞…三七二）《死トイフコトオソロシキイマハシキ故ニ文字ノ音ノコヨヘル四アル物ライミテ酒ヲノムモ三度五度ノミヨロツノ物ノ数モ四ライマハシク思ヒナレタリ、ソレホドニ、四ノ文字ノ音タニモイマハシキ心ニ、正月ハコトニオソルヘキ死セル魚鳥ヲ家ノ内ニ取入テキリモリイリヤクハ》（巻九 終…迎講事）〔小学館…対応箇所なし〕

④（古…四三二・左・七／貞…三七二）《カクノミ顛倒ノ心ニテ世間ノアサキ道理ヲタニモシラス。フカキ仏法ノ義理誠ニサトリカタシ》（巻九 終…迎講事）〔小学館…対応箇所なし〕

しかるに、総索引には載せないが、ダニには次の例もあつて、これも米沢本との対応例である（類推・c・②の例参照）。

⑤（古…一七六・右・三／貞…一四七）《仏法世法ノ恩ヲカフレル弟子タニモ打ステ、侍ニコレホトネンコロニオハスル事シカルヘキ先世ノ契ニコソトマテアマリニアリカタク思ニイタクカクシ給コソイフセケレ》（巻四・終…上人之父女之看病事）

したがって、古活字本には、少なくとも二十一例のダニが存することになる。なお、米沢本にあつて古活字本に見えないダニは、次の四例である。

・（二六四）《暇だに給はるべくは、案じ詠みてこそ見候はめ》（仮定

条件・②の例）〔この話し自体が古活字本や貞享本には無い〕

・（二九四）《亡き人の煙となりし跡をだになほ別れゆく今日ぞ悲しき》（否定・③の例）〔古活字本や貞享本には見えない。米沢本にあつても、成立後の加筆とされる歌である〕

・（三三三）《拙き強盗だにも、この教へを聞きて、発心して、過を悔いき。情けあらん人、などか心を発（おこ）さざらん。》（準典型的類推構文・③の例）〔当該話の末尾部分であるが、古活字本（二五九・右）や貞享本（二三三頁）では「強盗」の語自体が出てこない。〕

・（五一五）《世間に朝夕する事だにも、心疎略にして、たやすく覚ゆる事だにも、不覚もし、誤りもあり。況んや往生の大事、無始よりいまだ達せず。誰かやすしと思はむ。》（典型的類推構文・①②の例）〔古活字本（四二二・左・三）や貞享本（三四六頁）にも類似の文言はあるが、ダニは一度しか使われない〕

貞享整版本とは言えば、古活字本に見えるダニ・二十一例は総てこれを存し、米沢本にあつて古活字本に見えないものは、貞享版にも見えない。これら二本で見えるかぎり、流布本系では、（米沢本との「ずれ」はあるものの）ダニは少なくとも二十一例が存するということになる。

〔注⑦〕 総索引によると、古活字本にはサヘが四例見える。このうち三例は、米沢本と対応する。残る一例は次のようなものである。

①（古…一六七・左・四／貞…一四〇）《タ、平生ニ身ヲクルシメ心ヲワツラハスノミニアラス、臨終ノ時、妄念オコリヤスク愛執ワスレカタシ。コノ故ニ出離ノ道ヲサヘ、悪趣ノ苦ニシツミ長劫ニイテカタシ》（巻四・終…上人妻後事）〔小学館は、《出離の障りと成れば、悪趣に入りて苦を受くる事久し》とあつて、サヘは見えない。一八九頁〕

貞享整版本とは言えば、古活字本に対応して四例総てがみられる（一九・四九・一四〇・二五五の各頁）。加納氏の調査ではサヘは三例とされているが、慶長古活字本や貞享整版本で見える限り、もう一例を加えてもよいということになりそうである。

〔注⑧〕（注⑩）参照。

〔注⑨〕 文献⑤では、『万葉集』の用例に即して、この語の基本的意義をこのように定めている。また、平安時代のスラについては文献⑦の注⑪（一七

一頁以下)で、少しく触れている。

(注¹⁰) 総索引によると、古活字本のスラは八例であり、用例数自体は米沢本と変わらないが、中身は必ずしも同じではない。米沢本の①～⑧の例のうち、古活字本で対応しているのは①③④⑦⑧の五つに対するものであり(六一・右、二〇六・左、二〇六・左、二四二・右、三一六・左、古活字本の残る三例は、次のようなものである。

①(古…一九四・左・六／頁…一六二)《深く観スレハ無明ヲスラ断エ或ハ五品六根ニモ叶ヒヌヘシ》(巻五・始…円頓之学者免鬼病事)〔小学館〕《深く観ずれば、無明おのづから断ず》。二一八頁。また貞享本も《深く観ずれば無明を断じ》とあって、スラは見えない。〕

②(古…三四五・右・一〇／頁…二九七)《人間ニハ人ノ訴詔スルニ付テ人ヲ殺セルノミコソ其沙汰有レ。ソレスラ訴人ナケレハ沙汰ナシ》。(巻七・終…人殺害酬事)〔小学館〕「ソレスラ」云々に対応する一文がない。四五九頁

③(古…四二五・左・一／頁…三六六)《山野ノ獸、江海ノ鱗十惡ノ業ニヨリテ、ツタナキ報ナルスラ、衣食住処ヲツカラソナヘタリ。(中略)イハンヤ五戒十善ノ因縁ニヨリテ人間ニ生タリ。衣食住所ヲノツカラ有ヘシ》(巻九・終…証月房上人遁世事)〔小学館〕《山野の獸江海の鱗、皆食物も自らあり》。五五二頁

また、総索引には「ソラ」の項目もあって、次の一例を見出すことができる。「ソラ」の形が今昔物語集に頻出することは、よく知られているよう。大鏡や著聞集にも「ソラ」の例が見える(文獻⑦・一七一頁の注⑪。文獻⑪・一二二頁)。

④(古…四四五・左・六／頁…三八三)《天台ノ師ノ言ク真ノ無生ノ人ハ福ヲソラナサス。イハンヤ罪ヲヤト。智論云菩薩実相ニ住スル時一法モ得ズ。戒ヲヤフルヘシヤ。答云実相ニ住スルカ故ニ猶福ヲツクラス。イハンヤ罪ヲヤ》

米沢本での対応箇所には⑤と⑥と二つのスラが見えるが、その⑤に対応するものだけが古活字本にも見られることになる(したがって、米沢本にだけあって、古活字本に対応例が見られないのは、②と⑥との二つだけということになる)。以上の検討から、古活字本には、スラ(ソラ)が、少なくとも九例見られるということになるであろう。そして貞享整版本

では、先の①の例を減ずるため、スラは八例ということになるかと思われる。

参考文献

- ① 加納協三郎(一九三八)「院政鎌倉期に於けるダニ・スラ・サヘ」『国語と国文学』一五卷一〇号
- ② 此島正年(一九六六)『国語助詞の研究』(桜楓社)(一九七三・増訂版による)
- ③ 鈴木ひとみ(二〇〇五)「副助詞サエ(サヘ)の用法とその変遷―ダニとの関連において―」『日本語学論集』一号(東京大学)
- ④ 田中敏生(二〇一二)「古今和歌集」の副助詞ダニ―(相対的輕少性)の意義をめぐる―『四国大学紀要(人文)』三八号
- ⑤ 田中敏生(二〇一三)「万葉集」の副助詞スラ―基本義(把同的極限性)措定の試み―『言語文化』十一号(四国大学)
- ⑥ 田中敏生(二〇一四)「万葉集」の副助詞ダニ―上代における(相対的輕少性)の意義の確認―『四国大学紀要(人文)』四二号
- ⑦ 田中敏生(二〇一五)「大鏡」の副助詞サヘ―平安朝和文における(周縁波及性)の意義の確認―(其三)―『四国大学紀要(人文)』四四号
- ⑧ 田中敏生(二〇一七)「醒睡笑」の副助詞サヘ―基本義(周縁退縮性)措定の試み―『四国大学紀要(人文)』四八号
- ⑨ 田中敏生(二〇一七)「宇治拾遺物語」の副助詞ダニとサヘ―中世説話集における(相対的輕少性)〔周縁波及性〕の意義の確認―『四国大学紀要(人文)』四九号
- ⑩ 田中敏生(二〇一七)「十訓抄」の副助詞ダニとサヘ―中世説話集における(相対的輕少性)〔周縁波及性〕の意義の確認―(其二)―『四国大学紀要(人文)』四九号
- ⑪ 田中敏生(二〇一八)「古今著聞集」の副助詞ダニとサヘ―中世説話集における(相対的輕少性)〔周縁波及性〕の意義の確認―(其三)―『四国大学紀要(人文)』五〇号
- ⑫ 田中敏生(二〇一九)「平井本『保元物語』の副助詞ダニ(附・サヘ)―中世軍記物語における(相対的輕少性)の意義の確認―『四国大学紀要(人文)』五〇号

米沢本『沙石集』の副助詞「サヘ・スラ」——中世説話集における〈相対的輕少性〉（周縁波及性）〈把同的極限性〉の意義の「確認」——

文）五二号

⑬ 田村清子（一九八四）「副助詞の変遷——その契機の説明を中心に——」『国語と教育』九号（長崎大学）

⑭ 土屋有里子（二〇一二）『沙石集』諸本の成立と展開』（笠間書院）

（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）